【研究論文】

地域子育て支援活動を通した保育者の専門性の向上
－大学における親子教室の取り組みを通して－

長谷　守紘*

要　旨

本研究では、保育者養成大学の主催する親子教室が地域子育て支援としてどのような意義や役割を果たしているのかについて検討した。親子 8 組のアンケート調査、学生 6 名の振り返り記述を分析した。参加した保護者にとって、子と共に活動を楽しみ、その体験を共有することによって、子どもの新たな一面に気づき、子どもに関わる姿勢が変化した。また、他の保護者と交流する機会となり、悩みが共有され、自己認識の変化や新たな行動の喚起が生じた。一方、親子教室の参加をいかに継続的な子育て支援につないでいくかが課題であった。学生にとっては「活動を計画、実行する力」「多様性を考える、想定外に対処する力」「チームで保育する力」「保護者に対応する力」といった現代の保育者に求められる専門性の高まりが見られた。さらに、ここで得た学びをいかに今後に生かしていくかが課題となった。

キーワード：地域子育て支援、保育者、親子教室

Ⅰ．はじめに

これまで地域子育て支援サービスは保育所や認定こども園などで実施されることが多かった。また、地域子育て支援拠点として、いわゆる子育て広場が公共施設にて活動を行ってきた。これらの活動は、乳幼児とその保護者を対象として、気軽に集い、交流したり、子育ての不安・悩みを相談したりすることができる場といえる [1)]。つまり、地域子育て支援サービスには、子どもの遊び場、保護者の語り場、親子のふれあいの場としての機能があるといえる。親子で一緒に表現遊びを体験することにより、親の子どもの表現に対する考えや参加後の親子の変化について考察した吉川（2016）は、親自身も子どもと一緒に活動を楽しむことによって、親のイライラや子育ての不安が軽減し、子どもの言動に対してゆとりをもって接することが可能になったことや親子でのコミュニケーションがさらに増し、子どもの表現を枠にはめることなく見ることが出来たという親の意識の変化が明らかにしている [2)]。

保育者養成を行う岡崎女子大学・岡崎女子短期大学では、地域貢献・子育て支援を目的として親子教室を主催してきた。本研究では、子ども好適空間研究所の hygge エリアを舞台に、保育者養成大学に通う大学生が主体となり、乳幼児が思いっきり遊べる場、親子が一緒に活動してふれあう場、保護者同士が悩みを語り合える場を提供することによって、親子にとってどのような変化がもたらされるかを検討する。具体的には、親子教室の活動を通して、親子・子ども同士のふれあいは子どもにとってどのような経験となったか、親の子どもに対する捉え方がどのように変化したか、保護者同士の交流は子育てに関する認識にどのような効果を及ぼしたかに着目する。

大森・太田・水谷（2014）は、保護者が期待する保育士の専門性の構成要因として「食育・発達支援」「子育て支援」「社会的養護」を挙げている [3)]。本研究では、保育者養成大学に通う学生たちが、実際に地域子育て支援活動として親子教室の運営に携わる中で、どのように保育者としての専門性を向上させていくのかについても検討を行う。

Ⅱ．目的と方法

1．目的

地域貢献の一環として保育者養成大学の主催する親子教室が、地域子育て支援としてどのような意義

*岡崎女子大学

や役割を果たしているのかを明らかにする。そして、親子教室をより効果的に実施するための方策について示唆を得る。さらに、親子教室の運営を通して、学生がどのように保育者としての資質・能力を向上させていくのかを明らかにする。そして、保育者養成大学における効果的な教育活動について示唆を得る。

２．方法

令和5年8月16日、保育者養成大学で開催された親子教室「みんなで一緒に海のお宝を探しにいこう!!」は、心理学ゼミナールの女子大学生3年生6名によって、企画・運営されたものである。

親子教室に参加した 8 組の保護者に対してアンケート調査を実施した。アンケートは、活動に対する満足度や好きな遊び、普段と当日の子どもに対する認識、関わり方について尋ねる項目である。身体表現遊び、制作遊び、ゲーム遊びについては、親子それぞれの満足度を 5 段階評定、感想と好きな遊びを自由記述で求めた。ぴあトークについては、保護者の満足度を5段階評定、感想を自由記述で求めた。子どもに対する認識は「想像力」「協力心」「積極性」について 5 段階評定、新たに気づいたことを自由記述で求めた。子どものとの関わりは「子どもの意見を尊重しているか」「親として大切なことを伝えているか」について、5段階評定を求めた。これらの調査結果をもとに、親子教室が果たした役割や意義について分析を行う。親子教室の活動を通して、子どもに対する見方や親子の関わり方、子育てについての認識がどのように変容したかを検討する。

調査にあたって、親子教室の案内に研究への協力依頼を付記した。また、親子教室への参加が確定した方へ送付するメールにて研究の協力について依頼を行った。その上で、当日には依頼状と研究に関する説明書を用いて口頭で説明を行い、同意を得られた参加者にサインをいただいた。なお、研究への協力は親子教室への参加の条件ではないことを明確にしておいた。

表１．親子教室の参加者一覧

番号	親	子　性別（年齢）
1	父	男（4）
2	父	男（5）
3	父	女（5）
4	父母	女（6）、男（3）
5	母	男（4）、女（4）
6	母	男（4）
7	父母	男（5）、男（2）、女（2）
8	父母	男（3）、男（0）

アンケートは回答者を識別するため回答用紙に事例番号を付与したが、その旨を十分に説明した上で実施した。得られたデータは、事例番号で管理することによって匿名化を図った。その上で、コンピューターを使って統計的処理を行った。

運営主体となった大学3年生6名には、振り返りを自由記述式で実施した。親子教室への各自の取り組みを振り返りシートに記入してもらい、自覚された保育者としての専門性の向上について分析を行う。分析では、計画段階、準備段階、実行段階の 3 つ段階に分けて、検討を行った。なお、学生への研究説明はゼミナール活動内にて口頭で行い、同意を書面にて得た。なお、本研究は岡崎女子大学・短期大学の研究倫理審査（受付番号 : 23016）による承認を受けて実施された。

表２．親子教室に参加した学生一覧

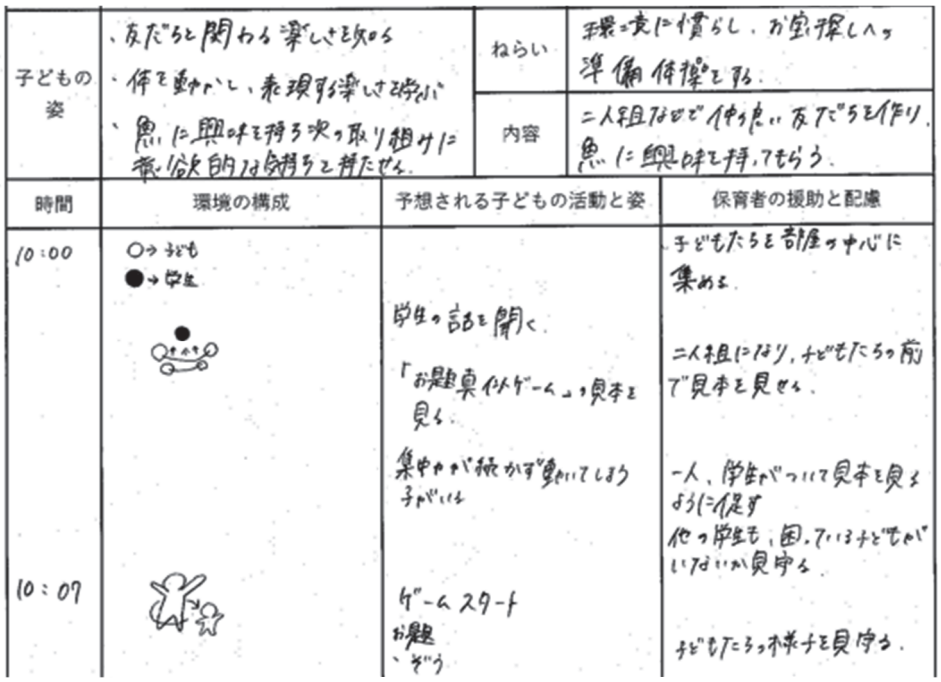
学生	役割
A	リーダー、宝探しゲーム（主担当）
B	参加者募集、宝探しゲーム
C	身体表現遊び（主担当）
E	身体表現遊び、音響
F	会計・物品調達、保護者ぴあトーク
G	保護者ぴあトーク（主担当）

３．実践の概要

まず、地域子育て支援に関する事前調査を本学教員に対して実施した。幼児教育や子育て支援を専門とする 3 名の教員への聞き取りを通して、乳幼児をもつ保護者が今求めている支援について調査した。

その上で、具体的な支援活動の立案を行った。親子で取り組む身体表現活動と制作活動、子ども同士で取り組むゲーム活動、保護者同士で取り組むぴあトークを盛り込み、親子にとって有意義な親子教室になるように計画を進めた。各セッションごとに指導計画（略案）を作成し、ゼミで検討を行った（図1·2·3）。

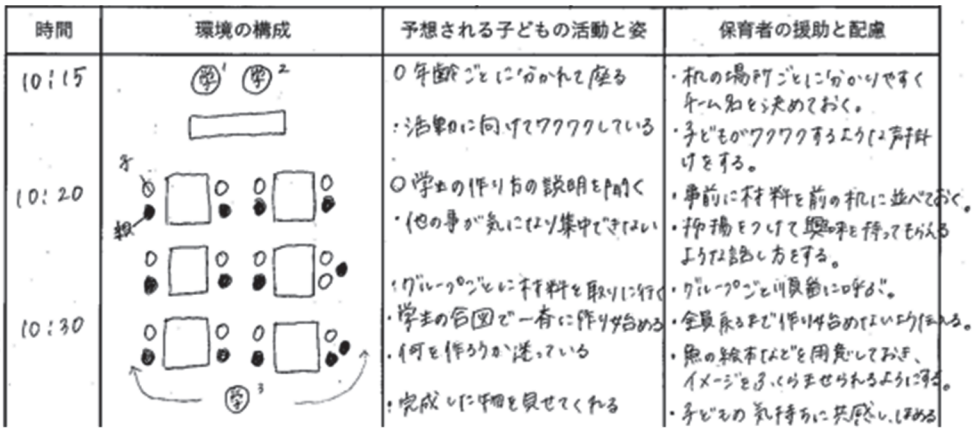
導入の活動として、身体表現遊び「お題まねゲーム」を行った。お題に出された動物を全身で表現するゲームである。子どもたちが動物になりきり、樹木の役となった保護者の周りを歩き、１周したらハ



子どもの姿	・友だちと関わる楽しさを知る ・体を動かし、表現する楽しさを味わう ・魚に興味を持ち次の取り組みに意欲的な気持ちを持たせる。	ねらい	環境に慣らし、お宝探しへの準備体操をする。
		内容	二人組などで仲良い友だちを作り、魚に興味を持ってもらう。

時間	環境の構成	予想される子どもの活動と姿	保育者の援助と配慮
10:00	○→子ども ●→学生	学生の話を聞く。 「お題魚イメゲーム」の見本を見る。 集中が続かず動いてしまう子がいる	子どもたちを部屋の中心に集める。 二人組になり、子どもたちの前で見本を見せる。 一人、学生がついて見本を見るように促す 他の学生も、困っている子どもがいないか見守る。
10:07		ゲームスタート お題 ・ぞう	子どもたちの様子を見守る。

図 1. 身体表現遊びの指導計画の一部



時間	環境の構成	予想される子どもの活動と姿	保育者の援助と配慮
10:15	学1 学2	○年齢ごとに分かれて座る ・活動に向けてワクワクしている	・机の場所ごとに分かりやすくチーム名を決めておく。 ・子どもがワクワクするような声掛けをする。
10:20	子 親	○学生の作り方の説明を聞く ・他の事が気になり集中できない	・事前に材料を前の机に並べておく。 ・抑揚をつけて興味を持ってもらえるような話し方をする。
10:30	学3	・グループごとに材料を取りに行く ・学生の合図で一斉に作り始める ・何を作ろうか迷っている ・完成した作品を見せてくれる	・グループごとに順番に呼ぶ。 ・全員終るまで作り始めないように伝える。 ・魚の絵本などを用意しておき、イメージを膨らませられるようにする。 ・子どもの気持ちに共感し、ほめる。

図 2. 制作・ゲーム遊びの指導計画の一部

段階（分）	保護者の活動	ファシリテーターの支援
つかむ（5分）	○アイスブレイクとして「実は○○です」自己紹介をする。（「実は」を最初につけて名前、子どもの年齢、人数、（性別）、好きな絵本を言う）	○まず学生から「実は○○です」自己紹介をする。 ○学生は保護者の言葉に耳を傾ける。 ○円になって全ての人の顔を見て話ができるようにする。
深める（15分）	○順番に子育てBOXから１枚ずつ紙を取り出す。 取り出したテーマについて話し合う。 話すことが難しいテーマについてはパスを使う。 ●聞く内容 １子育てで困った瞬間　２我が子のかわいいエピソード　３子育てをする中であったら嬉しいサポートやサービス　４子育てをしていて大変なこと ５子どもと一緒によく行う遊び	○リラックスした雰囲気になるように笑顔で楽しく言葉遣いに気を付けて行う。 ○パスを使って良いことを伝え安心して話せるようにする。 ○保護者の言葉に共感の言葉や感想を言い、積極的に関わる。

図 3. ぴあトークの指導計画の一部

イタッチするという活動である。次の活動に展開しやすように、お題の最後が「魚」になるように順番を工夫した（図 4）。

続いて、メイン活動である制作・ゲーム遊びを行った。夏らしく海の生き物を親子で制作して、子どもはゴーグルをつけてバッグを持ち、水中に宝探しに行くというゲームである。親子で海の生き物と釣り竿を制作してもらい、学生たちがあらかじめ作っておいたゴーグルとバッグを仕上げてもらった。ボール紙に色鉛筆や色ペン、シールやはさみを使って自由に制作した（図 5）。子どもたちが制作した生き物と事前に学生たちが作っておいた生き物を、海に見立てた教室に配置して、水中を冒険しながら海の生

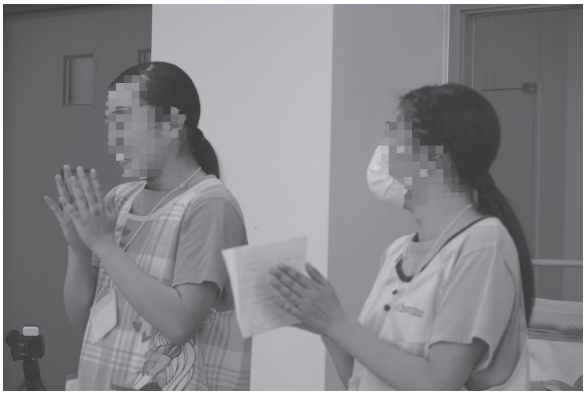


図 4. 身体表現あそびの説明をする学生

図 5. 海の生き物を制作する親子

図 6. 海の中を表現した室内で魚釣りをする子ども

き物を捕まえていき、最後にはお菓子の入った宝箱を見つけるという展開であった（図 6）。

子どもたちが水中宝探しゲームをしている間、学生 2 名がファシリテーターとなって保護者のぴあトークを実施した。参加者を 2 グループに分けて、ぴあトークに参加しないグループは子どものゲーム活動を参観する時間とした。ぴあトークでは、まずアイスブレイクとして自己紹介を行った後、話し合いのテーマの紙を BOX から引いてもらい、保護者に決めてもらったテーマについて話し合った。発言者には、コミュニティーボール（哲学対話における発言者が持つ毛糸で編まれたボール）を使用して、全員が発言する機会を保障した。テーマは、「我が子のかわいいエピソード」「子どもと一緒によく行う遊び」「子育てをする中であったら嬉しいサポートやサービス」などを話し合った。最後には、親子で楽しめる手遊びを実演して終了した（図 7･8）。

Ⅲ. 結果

1. 保護者アンケートの結果

各活動の満足度を 5 点満点で算出した。身体表現遊びは 4.6 点（保護者）、4.3 点（子ども）であった。制作遊びは 4.9 点（保護者・子ども）であった。ゲーム遊びは 4.6 点（子ども）であった。ぴあトークは 4.5 点（保護者）であった。どの活動においても、おおむね「楽しかった」「役に立った」とする肯定的な感想が目立ったが、中には「苦手だった」「難しかった」などの感想も見られた。

ぴあトークの感想として「子育てに対する自分の気持ちをアウトプットする機会がなかったので、自己認識の向上に役立った」（親 4）とあり、子育てについて他者に伝えることによって、自分の気持ちを

図 7. ぴあトークをファシリテートする学生

図 8. 他の参加者の語りに耳を傾ける保護者

確認する機会となっていたようだ。また、「みんな同じことで悩んだりしているんだとわかって、心強くなりました」（親 6）とあるように、共感的理解からエンパワメントが行われた。さらには、「他の方のお話をうかがえることは参考なります。もっと子どもと接する機会を増やそうと思いました」（親 1）とあるように、自分自身の行動を見つめ直し、行動する意欲が高まっていることもうかがえた。

普段の様子と親子教室当日の子どもに対する認識について尋ねた項目では、親子教室を通して、「想像力」「協力心」「積極性」といった子どもに対する認識が変化した保護者が 3 名いた。この 3 名の保護者に共通していたのが、身体遊び、制作遊び、ゲーム遊びともに親子とも「楽しかった」と高い満足度に評定していることであった。

子どもに対する新たな気づきを自由記述で回答してもらった結果では、「ハサミでものを切るということに積極性があったこと」（親 1）、「引っ込み思案ですが、好きなもの・ことがあると積極的になれるようです」（親 3）、「自分で色々したいという気持ちが大きいことに気づきました」（親 5）などが挙げられた。これらの積極性や主体性に気づいた保護者に共通して、「子どもの意見を尊重して関わる姿勢」が普段より親子教室当日では高まっていた。

２．学生の振り返り～計画段階～

⑴制作遊び、ゲーム遊び

メインの活動となるため、学生たちはより魅力的な活動にするために、インタビュー活動を行ったり、季節にあった遊びを調べたりした。今回の親子教室では、3～5 歳の異年齢を対象としていることに対して、難易度や進行パターンを設けて工夫をし、当日の動きをイメージしながら様々な展開を計画した。その反面、計画に時間がかかりすぎてしまったため、リーダーの役割やテーマや目的など方向性を共有していくことの重要性に気づいた。

⑵身体表現遊び

子どもたちが興味をもちそうなことを想像しながら、制作・ゲーム活動につながるように活動を計画した。親子のふれあいを生み出すためにペアの活動を考えたが、ペアが組めない場合等の留意点を想定しながら計画を進めていった。

⑶ぴあトーク

初対面の保護者同士が話しやすいように展開を検討した。話し合い活動を２グループに分け、最初にアイスブレイクを、最後に手遊びを加える工夫をした。他にも、話し合いのテーマを書いた用紙を BOX に入れておき、保護者に引いてもらって決めたり、コミュニティーボールを使用したりする工夫もした。保護者の視点に立って、計画を立案すること大切さに気づいた（表 3）。

表 3．計画段階における学生の振り返り内容

【制作遊び・ゲーム遊び】
- 親子教室を実施したことがある教員やお子さんがいる教員にインタビューを行い、様々な視点から考えて計画した。季節に合った制作遊びを中心に調べることで、イメージを広げやすくした。（B）
- 幅広い年齢の子どもを対象として行うため、複数の難易度を設けたり、ゲームの進行パターンを考えたりした。（A）
- 計画が決まるまで時間がかかってしまったため、リーダーはその日に決めたいことをしっかり決めておいて、スムーズに進んでいくよう意識していかないといけない。（A）
- 活動のテーマや目的をあらかじめ決めておくことで、近い方向性で考えることができ、話し合いもしやすいと思った。（B）

【身体表現遊び】
- 異年齢の子どもたちに何をやったら喜ぶかを想像しながら計画した。（C）
- 子どもたちが次の制作、ゲーム活動への気持ちが高まるような身体表現遊びにした。（D）
- 親子でペアが組めない場合など、さまざまな場合を想定して計画した。（D）

【ぴあトーク】
- 指導案を早めに考え、意見を出し合って計画した。しかし、もう少し早く他のメンバーに共有できるとよかった。（F）
- 話しやすい雰囲気を作ることができるようにメイン活動に入る前にアイスブレイクを行うようにした。最後は、手遊びを加え、今後も保護者の方と子どもが触れ合うきっかけ作りになればよいと思い考えた。（E）
- 保護者全員だと話がしにくい方や子どもの活動をしている姿を見たい方もいると気がつき、２グループ制にすることにした。保護者の方の視点になって、計画を自分で考えられるようにしていきたい。（E）

３．学生の振り返り～準備段階～

⑴制作遊び・ゲーム遊びの準備

計画の段階よりもメンバー間の連携が取れるようになってきたが、さらなる情報共有が必要となった。完成のイメージを共有してそれぞれが役割分担を果たすようにしたり、変更点を素早く報告する重要性に気づいた。

準備を進めていくうちに、具体的なアイデアがたくさん浮かび、それらを取り入れていった。それぞれが準備する道具の１つ１つが、使用する子どもたちにとって、魅力を感じるものになっているか、使いやすいものであるか、危険はないかなどを考えながら制作した。

そして、室内の配置では、どのようにしたら子どもたちがより安全に楽しめるかを想像しながら、いろいろなパターンで配置を繰り返し、試行錯誤をしながら決めていった。

⑵参加者募集

学生Ｂがオンラインの Forms を作成して、参加者募集を担当した。学外の保護者とのやり取りということで、担当教員やメンバーと１つ１つ文面を確認しながら丁寧に進めていった。応募者多数となったため抽選を行い、当落メールを送付することになった。そのとき初めて親子教室のメールアドレスを取得して、返信を行った。しかし、メールが届いていない（迷惑メールフォルダに入ってしまった）という事態が生じたため、改めて応募者すべてに電話連絡を行うことになった。そのため、事前に親子教室のメールアドレスを伝えておき、そこから当落メールが届くことを伝えておくとよかったという反省を得た（表 4）。

表 4. 準備段階における学生の振り返り内容

【制作遊び・ゲーム遊び】

・準備では「今日は何まで終わらせるか」を決めて、段取りよく取り組んだ。準備を進めていくうちに計画案からの変更点が出てきたが、それを一部の人のみが認識している状態で進んでいってしまった。そのため、変更点はすぐに共有し、全員が一緒の認識をしていることが大切だと思った。(A)

・疲れてネガティブになるときもあったが、声を掛け合って励ましあった。それぞれが何を準備するか決めて取り組んだことで、補い合って作業することができた。(F)

・より海の雰囲気を表現するため、スズランテープでカーテンを作ったり、青いビニールシートで壁を覆ったりなど、準備をしていくうちにどんどん新しいことを思いついて、それを取り入れていくことができた。(A)

・部屋の装飾では、イメージ図を作り、共有したりしておくべきだった。そうすることで、やることを整理できて、もっと自分から動けたと思う。(B)

・子どもたちがぱっと目につくように海の生き物を大きく描いた。何の生き物か分かるように特徴を捉えて描いた。(C)

・ゴーグルは子どものサイズに合うように何度か作り直した。海の生き物は、子どもが喜ぶようになるべくカラフルで色々な種類にした。(D)

・宝箱は細かいところまで作り込んだ。リアルな宝箱になるように鍵をつけ、その鍵をさりげなく魚の裏側に貼ることで、前の活動とつながりがもてるようにした。(B)

・道具は多めに作っておき、当日足りないということがないようにした。また、子どもたちがけがをしないようにゴーグルはラミネートで厚くしたり、竿は新聞紙やマスキングテープで巻いて補強したりした。(E)

・取ってはいけない海の生き物も作り、２つ並べて貼ることによって、魚探しゲームがより楽しめるようにした。(E)

・宝箱を隠す場所は、子どもたちが探すときに踏まないか考えながら設置した。親が子どもの様子を参観しやすいように魚の範囲を広げた。(C)

【参加者募集】

・Forms による募集では、分かりやすく伝わるように文章を何度も考えた。メンバーにも見てもらい修正をした。メールでは、どのようにしたら経緯が伝わるか、分かりやすいかを考えながら丁寧に書いた。(B)

・当選メール等の連絡が応募者にしっかりと届いているか、正確にわからず不安だった。次回からはあらかじめ伝えたメールアドレスを迷惑メールにいかないようにするということを伝えるようにしたい。自分も不安だったように参加される方も不安だったと思うので、電話対応するのにもっと早く行うようにすればよかった。(B)

４．学生の振り返り～実行段階～

⑴子どもとの関わり

親子教室当日、予想以上に元気な子どもたちを前にして、それぞれ体勢や声の大きさ等、相手に伝わるような話し方の工夫を行った。また、できたことに着目して自信につながる声かけを意識したり、子どもの様子に合わせて臨機応変に対応したりするように心がけた。

⑵保護者との関わり

保護者には、親しみをもってもらうために、明るく丁寧に対応するように心がけた。ぴあトークでは、グループ間の人数の偏りや分離不安が強い親子の存在など想定外の対応を迫られながら、臨機応変に対応した。また、話し合いの展開に応じて、明確化を促すような質問をしたり、自己開示をしたりしながら、ファシリテートする難しさを感じた。

⑶全体

全体を通して、活動がスムーズに進行していくように、１人１人が自分ができることを見つけて、子どもや保護者に積極的に対応するようにした。特に、ペアのいない子どもやおとなしい子ども、作業が早く終わってしまった子どもに声をかけるようにした。

⑷反省点

実行段階では他の段階に比べ、反省点がたくさん挙げられた。特に多かったのが、年齢差や個人の特性から生まれる作業スピードの差への対応であった。その場での臨機応変な対応には限界があるため、あらかじめ計画を立てておく必要を実感した。また、全体の進行において、計画通り進まなかった場合、学生たちが個々に対応するのではなく、チームとして対応することの難しさを感じた。他にも、ゴミ箱の設置やゴーグルの大きさ、竿の強度と補修に関する現実的な面での改善点も見つかった（表 5）。

表 5．実行段階における学生の振り返り内容

【子どもとの関わり】

・子どもの様子を見ながら進めていった。声かけや姿勢など、子どもが聞きやすい体勢を取った。(C)

・子どもたちがとても元気いっぱいだったため、マスクをかけていても伝わるよう声のボリュームを上げた。(F)

・全体に指示を出す場面で、友だちと話をしている子がいたら、「お話してもよい？」と言い、注目してもらえるようにした。(E)

・子どもたちに伝わりやすいように笑顔ではきはきと話すことを心がけた。絵を描いたり、身体を動かしたり、自分のイメージを形にできたとき「上手にできたね」と自信につながるような声かけをしたりした。(D)

・宝探しゲームでは、みんなで一緒に回る予定だったが、個々が好きなように動いたので途中から個々に関わったり見守ったりするなど臨機応変に対応した。(B)

【保護者との関わり】

・受付では、入りやすく楽しみな気持ちになれるように明るく挨拶をし、丁寧に声をかけた。研究への協力依頼する際には分かりやすく伝えるようにすることを心がけ、声をかけるタイミングも座ってから行うなど工夫した。(B)

・保護者の方も、始めの方は特に緊張していることが見受けられたため笑顔で話しかけにいくことを意識しました。(F)

・ぴあトークでは活動時間が短く、もう少し話を広げたいと感じた。また、子どもがパパママから離れがたく、活動に参加できない方がいた。A グループと B グループで人数に偏りが想定外に生じて戸惑ってしまい、開始が遅れてしまった。(F)

・保護者の話し合いでは共感の言葉ばかりになってしまったので、質問など自分から話せるとよかった。(E)

【全体】

・全体を通して自分は今何ができるかを考えて行動することができた。一方で、全体を見て動こうとするあまり、子どもや保護者としっかり関われなかった。(B)

・ペアがいない子どもがいた場合、小さい子であればその子を近くで見守り、活動に参加している子であれば、そこに入り、活動の補助を行った。子どもの方からよく話しかけてくれる子も、少し恥ずかしがりあまり話しかけて来ない子どももいるため、宝探しゲーム中など、話したことのない子どもに声をかけてみた。(A)

・制作の時間は、時計を見ながらスムーズに進められるようにメンバーで話し合いながら進めた。早く作業が終わってしまった子には「シールまだあるよ」など声をかけながら皆がそろって次に進められるように配慮した。(E)

【反省点】
・企画が始まるまでの間、何かやる時間、例えば、来た子から読み聞かせなどを考えられたらよかった。(C)
・特に制作の際、子どもの作るスピードに差があるため、早くできてしまった子がやることがなくなり、教室をうろうろしてしまった。そのため、早くできた子用にやることを用意した方がよかった。(A)
・今回はテンションの差が大きすぎたり、楽しみ方が少し違ったりする個人差への対応が難しいと気づいた。計画するとき、年齢差を中心に考えていたけれどそれだけではなくて早く終わった子への対応や手が止まってしまう子への対応など、もしもの時をもっと考えておくべきだった。(B)
・宝探しゲームのとき、思ったより早く子どもが魚を釣り終わってしまい、後半に見に来た保護者の方は魚釣りをほとんど見れず、宝を探すところしか見れなかった。(A)
・活動を始めるタイミングや次の活動に移る判断を学生だけで話し合いをしている時間があった。その間来てくれた方々がおいてきぼりになっていた。その時、全体を見ている人が１人いて、様子を見て「次にいっていいよ」と指示を出したり、誰かが話し合っている時には他の人が回したりするとよいのかなと思った。(B)
・かばんのひも、竿についていたマグネットが取れてしまったときにセロハンテープなど直せる道具を持っていなかったので用意しておく必要があると思った。(E)
・ゴミ箱が置けていなかった。(C)
・子どものサイズに合わせてゴーグルを作ったつもりだったけれど、大きかった。(D)

５．学生の振り返り～次回の実践に向けて～

今回の親子教室を総括し、次回の実践を展望した。まず、親子教室の企画・運営を通して、自身の保育力の向上を実感している。それは、メンバーで協力して、最後までやり切ったという達成感からきている。そして、その達成感の源になっているのが、親子教室での手ごたえである。子どもや保護者が楽しそうに参加している姿から感じ取っている。時間をかけて準備をしてきた努力が報われた。一方で、準備の時間が予想以上かかったことが次回に向けた課題となっている。役割分担と連携の在り方、効率的な時間の使い方等を見直す必要性がある。

また、保護者と直接関わることができる貴重な機会として捉えられている。中には、保護者から得た意見を自身の卒業研究に生かそうとする学生も見られた（表 6)。

表 6. 次回の実践に向けた学生の振り返り内容

・準備段階では、休日を使って大変だったが、当日子どもたちの反応がよく、がんばって準備を進めてきてよかったと感じた。子どもの行動を正確に予測することはできないため、計画通りに進まない場面も多くあったが、それぞれが臨機応変に対応して、保育の力もついてきていると実感した。計画段階から最終リハーサルが終わるまでを振り返ると、最初の方に時間を使いすぎてしまった。今回の経験を生かして、次の実践のときはできるだけ早く計画を立てて早く準備に入ることで最後の方が忙しくならないのではないかと思う。(A)
・ゼミのみんなと協力してやり切ることができた。海というテーマや雰囲気を全体的に作り上げることができたのはよかった。しかし、情報共有の仕方や役割の負担差など課題になる部分も多いため次回に活かしていきたい。当日子どもたちが魚を一生懸命描いたり、はさみで切ったり、かばんとゴーグルをしっかりとつけてやる気満々の姿を見て、楽しんでくれているのが伝わって嬉しかった。同時に、保護者も楽しそうにしていて親子教室のよさを感じた。宝箱を見つけた瞬間、鍵を見つけた瞬間の反応はやってよかった！と強く思うことができた。年齢差への対応は難しいため、参加者の年齢を決めたり年齢ごとに分けて行ったりするなど工夫が必要だと思った。また、自分の担当以外のことをしっかりと理解できていなかったこともあったため、もっと注意深く確認するようにしたい。保護者にメールを送ったり、電話をしたりする経験もなかなかできないことなので経験できてよかった。(B)
・準備段階では、自分のスケジュールを計画的に進め、作業を手伝うべきだった。子どもが想像以上に元気だったので、活動前に手遊びや絵本の読み聞かせなどで一度落ち着かせ

るのもよいかと思った。(C)
・今回は他のメンバーにたくさん頼ってしまった。次回の実践では、しっかり準備をして、どんなことをしたいのか積極的に出していけるようにしたい。(D)
・計画から当日までそれぞれができることを精一杯やれたと思う。よい見方では丁寧ともいえるが、慎重でマイペースなメンバーが多い分、時間外の活動が多くなってしまったのでこれからはもう少し効率のよいやり方をしたい。第1回目の親子教室にしては、とてもよい出来だったと思うので大満足である。次回はまた今回とは少し違った内容で実施してみたい。(F)
・不安はあったが、皆で協力しながら楽しく、そして学びのあるよい親子教室を作ることができた。最初は緊張もあり、なかなか自分で動くことができなかったので、次回は子ども・保護者とも関わっていくことができたらよい。ぴあトークでは、保護者の貴重な意見を聞くことができたので、その意見をもとに卒業研究への活用を考えていきたい。次に親子教室を行う際は、絵本の読み聞かせや被り物や家に飾れるものを作っても面白いと思った。子どもが普段家でできないこと、家でも真似したり遊べたりできるようなものが他にも多くあると思うので今後も考えたい。(E)

Ⅳ．考察

1．参加者にとっての親子教室

全体的に満足感の高い教室となった。親子でのふれあい活動を通して、保護者の子どもに対する認識が変容している親子が見られた。親子でともに活動を楽しみ、その体験を共有する中で、子どもの新たな一面を発見できたのではないかと考えられた。また、親子教室を通して、多くの保護者が子どもの新たな側面に気づいた。特に、子どもの主体的な姿を活動の中で発見した保護者は、子どもの意見を尊重して関わろうとする姿勢が高まり、自身の子どもへの関わり方にも変容が見られたと考えられた。

ぴあトークでは、他の保護者の意見を聞くことができる貴重な機会となった。その効果として、悩みの共有、自己認識の変化、新たな行動の喚起が挙げられる。これらの効果は、グループを2つに分けたことにより、短時間でも一人一人の保護者が話をする機会が確保されたり、コミュニティボールを使用したことによって、話し手の発言をじっくりと最後まで聴こうとする姿勢が高まったためであると考えられた。

2．学生にとっての親子教室

⑴活動を計画、実行する力

親子教室の活動を計画、準備、実行する中で、学生たちは「子どもたちが楽しめるためには」「保護者の役に立つためには」を常に考えた。それは、参加者の立場になって考えるという姿勢の高まりである。この姿勢は、保育現場においても、子どもや保護者に実態に即して活動を計画し、実行することにつながると考えられた。

一方で、効率よく作業を進める必要性にも気づいた。現場では多様で膨大な職務を限られた時間でこなしていかなければならない。保育士の職場でのストレス要因のうち、休憩の取得時間が短いこと、自宅への持ち帰り仕事が多いことは疲労につながり、バーンアウト状態をもたらす原因となるため[4]、持続可能で幸せな働き方を実現するために必要不可欠な気づきであった。時間をかけ、思いを込めて準備した活動に応えてくれた子どもたちの姿に保育者としてのやりがいを感じつつ、なおかつ効率的に進めることが重要である。

⑵多様性を想定する、想定外に対処する力

年齢差、個人差などから興味・関心や取り組みのスピードが異なり、実際に子どもを前にすると様々な想定外が起きた。それらには事前に想定して解決できる部分があったため、多様性を想定して対策を事前に考えておくことの重要性に気づいた。今回の親子教室は単発での開催であったため、事前に得られていた情報は参加する子どもの人数、性別、年齢だけであった。そのため、当初の計画から子どもの実態に応じて、変更して実施する中で、臨機応変に対応する力が養われたと考えられた。発達障がいの子ども、外国籍の子ども、貧困の子ども、医療的ケアを必要とする子ども、アレルギーのある子ども、不登園の子ども等の多様なニーズを抱えた子どもたちを包摂するインクルーシブ保育が現場では推進されている[5]。これらの要請に応えるためにも、多様なニーズを想定しつつ、想定外にもその都度臨機応変に対応する力を身につけていく必要がある。

⑶チームで保育する力

『保育用語辞典（第７版）』によると、チーム保育とは１つのクラスを複数の保育者で担任する複数担任制や、クラスそのものも解体して全園児を全職員で保育するなど、複数の保育者が共同で子ども集団の保育を行う状況であり[6]、全国各地で取り入れられている。保育をスムーズに計画・実施をするためには、チームとしてそれぞれの役割分担を明確にし、情報を共有しながら進めることの重要性に気づいた。リーダー役の学生Ａは、計画段階では思うように意見を集約して進められなかった反省を生かして、準備段階では段取りよく進めることができた。チームで進めることによって一体感と達成感を得た一方で、その難しさも感じる機会となったと考えられた。

⑷保護者に対応する力

保護者支援、子育て支援に不安をもっている学生は多く、初任期の保育者の１つの課題ともいえる。それを実際に、経験できる貴重な機会となった。特に募集を担当した学生Ｂは、メールや電話等で必要な連絡を確実に行う方法を試行錯誤しながら身につけていった。また、ぴあトークでファシリテーター役を務めた学生Ｆ・Ｇは、受容だけでなく、質問、明確化や自己開示の必要性を振り返った。これらはピアヘルピングの言語的技法であり、他にも繰り返し、支持などがある[7]。実際に保護者と関わることによって、これらのカウンセリングスキルを高めていく必要性を感じ取ったのではないかと考えられた。

Ⅴ．まとめ

本研究では、保育者養成大学が主催する親子教室は、参加した親子や運営した学生にとってどのような影響を及ぼしたのかを検討した。参加した保護者にとって、子と共に活動を楽しみ、その体験を共有ことによって、子どもの新たな一面に気づき、子どもに関わる姿勢が変化した。また、他の保護者と交流する機会となり、悩みが共有され、自己認識の変化や新たな行動の喚起が生じた。しかし、これらは部分的で単発的な結果であると考えられる。６ヶ月以下の子どもを持つ母親対象の交流会を月１回１年間にわたり子育てひろばで実施して効果検証を行った寺村（2015）[8]がエンパワメント状態の高まりを確認したように、子育て支援は継続的に実施され、保護者と支援者、保護者と保護者との間で安定した関係性を形成することが重要になる。親子教室の参加をいかに継続的な子育て支援につないでいくかは課題として残った。運営主体となった学生にとっては、「活動を計画、実行する力」「多様性を考える、想定外に対処する力」「チームで保育する力」「保護者に対応する力」といった現代の保育現場に求められる保育者としての専門性の高まりが見られた。学生Ｅが卒業研究に活用したいと振り返ったように、ここで得た学びをいかに今後に生かしていくかが課題であった。

付記

本研究は、JSPS 科研費 22K20290 及び岡崎女子大学・岡崎女子短期大学令和５年度個人研究費の助成を受けた。本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

1)二宮祐子(2018)『子育て支援 : 15 のストーリーで学ぶワークブック』萌文書林、pp.89-98
2)吉川暢子(2016)「親子での表現遊びに関する意識と影響－事前事後のアンケート調査から―」『美術教育学研究』48、pp.417-424
3)大森弘子・太田仁・水谷弘正(2014)「保護者が期待する保育士の専門性－保育士のキャリアパスを通して」『佛教大学社会福祉学部論集』10、pp.1-10
4)赤川陽子・木村直子(2014)「保育士の職場ストレスに関する研究－休憩時間・持ち帰り仕事からの検討－」『保育学研究』57(1)、pp.56-66
5)厚生労働省『子ども・子育て一般施策等への移行等の現場について』、https://www.mhlw.go.jp/content/12401000/001004235.pdf（閲覧日：2023 年 11 月 27 日）
6)梅田優子(2013)「チーム保育」森上史朗・柏女霊峰（編）『保育用語辞典第 7 版』ミネルヴァ書房、p.111
7)日本教育カウンセラー協会(2023)『新版ピアヘルパーハンドブック』図書文化、pp.56-69
8)寺村ゆかの(2015)「子育てひろば新規利用者対象のコネクション・プログラムがプログラム参加者のエンパワメントに及ぼす影響」『子育て研究』5、pp.9-20

謝辞

本研究にご協力いただきました親子教室に参加された親子の皆様、運営に携わった学生の皆様に厚くお礼申し上げます。